

研究ノート

看護大学生の学習継続のための学習意欲・ 動機づけに関する研究

A Study on Motivation and the Motivation for
Continued Study of Nursing Students

泉澤真紀¹⁾ 栗田克実²⁾

Maki IZUMISAWA, Katsumi KURITA

¹⁾旭川大学保健福祉学部保健看護学科 ²⁾旭川大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科

キーワード：学習動機づけ、学習意欲、看護教育、看護大学生

抄 録 (要約)

本研究の目的は、看護系大学で学ぶ看護学生（以下、学生）の実習内外の体験と学習意欲の特徴を学年別に把握することである。それに基づき看護を学ぶ学習意欲を支援するための教育的な示唆を得ようと考えた。A大学学生1～4年生212名に、自記式及びwebによる質問紙を配布・配信した（回収率93.0%）。調査内容は、属性及び実習内外の体験、看護志望動機、学習動機づけ14項目、学習意欲5項目で5件法を用いた。調査時期は8～9月で各学年を断片的に実施した。なおA大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

A大学学生の看護学実習は医療施設と福祉施設で実施されていた。また実習以外の現場体験は、ボランティアやサークル等の体験で全体の2割弱であった。また看護学生の看護志望動機は、経済的理由が一番高く、次いで社会性・将来性、看護への興味・関心、以上3項目で全体の約8割を占めていた。学習動機づけでは、看護師という職業観的価値に動機付けられる同一化的調整が最も高く、取入的調整、内発的動機づけ、外発的動機づけの順であった。特に1年生は高学年より上位3項目が有意に高かった。高学年になると学習動機づけは低下し、2～4年生では有意な差はなかった。また意図的主体的に行動しようとする学習意欲は各学年に有意な差はなかった。学習意欲は4年間の中で変化し変容していくので、その時々状況に合わせた個別的な学習動機づけを支援することが必要である。

I. 緒 言

昨今の看護大学の急増に伴い、教育水準の維持向上が課題となっている。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会は、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」¹⁾を策定し、社会の変化に対応し看護師として必要となる能力を備えた質の高い人材育成を目指している。このような少子化の社会背景の中、看護を志望して入学してくる学生は年々増加している²⁾。

「看護系の学生は他の学部の学生に比べて、講義によく出席するだけでなく自学・自習も行い、積極的に学習を行っている」³⁾といわれるが、一方で学修途中で留

年や退学等する学生も存在する。総務省統計局の窓口調査によれば、看護基礎教育機関に入学したにもかかわらず卒業できない学生は、卒業予定者の10%を占めているといわれ⁴⁾、学業不振による継続困難や、看護とは異なる進路を希望すると報告されている⁵⁾。また南本らも看護学生が退学に至る経験の中で、学習途中で学習難渋をおこしたり、余暇活動への傾倒があることを指摘している⁶⁾。看護に憧れを抱き入学しても、一部で膨大で過密な学習量、ミスマッチ、そして具体的に将来像を描けぬままモラトリアムに陥る者がいることが考えられる。入学後から看護の学習を継続していくために、看護に興味・関心をもち意欲的に学習継

続していくことは重要である。このような学習の動機づけは、学習遂行困難を減らしドロップアウトを最小限に食い止めることができると考える。

これまでの研究において学習意欲は、入学時より次第に低下していくことが指摘されている⁷⁾。1年次に行われる基礎看護学の学習の動機づけが最も高いものの⁸⁾⁹⁾、入学1年後には達成動機が下降していく¹⁰⁾ことから、この意欲を早い段階で獲得し持続できるかが学習を継続できる鍵となると考える。学習意欲や動機づけに関する研究は心理学や教育学の分野では広く行われているものの¹¹⁾¹²⁾¹³⁾、看護教育においてはまだ断片的である。看護学生1年生を対象の学習意欲の調査¹⁴⁾や、動機づけの学年別比較¹⁵⁾、看護大学生全学年を横断的に行った調査¹⁶⁾、学業を困難にしている要因¹⁷⁾等があるが、学生の看護志望の背景、学年推移の中で意欲の実態の把握はできなかった。「看護大学生の学習活動や学習意欲の特徴は、看護教育の在り方を反映する¹⁸⁾」ということから、学習意欲や動機づけの特徴を知ることによって看護教育への示唆が得られるのではないかと考えた。看護学生の背景や学年推移と学習困難との関係を明確にし、看護学生の初期段階の意欲の特徴と学年推移に着目した。

Ⅱ. 研究 方 法

1. 研究デザイン

質問紙調査（紙面および一部 web 調査）による量的記述的研究

2. 調査期間

令和2年8月～9月

3. 対象者

A看護大学学生1～4年生で、本研究に同意し回答が得られた212名。

4. 調査方法

自記式質問紙調査及びwebにおける質問紙配信調査

5. 調査項目

- 1) 属性：性別・年齢・学年・入学時の状況（現役生・浪人、社会人入学）
- 2) 看護学実習の経験の時期、看護学実習以外（フィールド等）での経験の有無
- 3) 看護の志望理由（単項式）

4) 学習困難についての不安や悩みと克服するために必要なこと（自由回答）

5) 学習動機づけ尺度：安藤¹⁹⁾の作成したで、4つの下位尺度（①内発調整3項目、②同一化的調整7項目、取入れ的調整3項目、外的調整3項目）について、佐藤²⁰⁾が看護教育において妥当性を検証した、合計14つの質問票を用いた。「あてはまる」(5点)～「あてはまらない」(1点)の5件法で回答を求めた。

6) 学習意欲尺度：浅野²¹⁾の作成した2つの下位尺度（①積極的関与3項目、②継続意志2項目）について、合計5項目で構成されている。「あてはまる」(5点)～「あてはまらない」(1点)までを5件法で回答を求めた。

6. データ分析方法

属性・看護学実習の経験とそれ以外の経験については記述統計を用いた。また1～4年生の学習動機づけ及び学習意欲については、下位尺度項目すべての得点から平均値と標準偏差及び中央値を算出した。性別・入学時の状況・学年による学習動機づけと学習意欲の2群の中央値の差の比較にはMann-Whitney *U*の検定、4群の中央値の比較にはKruskal-Wallisの*H*検定を用い、4群で有意であった場合はさらに2群の比較を行った。また下位尺度ごとの比較には対応のある*t*検定、下位尺度項目の信頼性をCronbachの α 係数で求めた。なお有意水準は5%とした。統計解析には、Microsoft Excel 2016 IBM SPSSver25.0を使用した。

7. 用語の定義

- 1) 看護大学生とは、文部科学省管轄の4年生大学で学ぶ看護学生のことをいう。
- 2) 学習動機づけとは、学習する上での意欲としての欲求を指す。本研究では自己決定理論²²⁾に基づき、自己決定の程度を連続体上でとらえその順に、外的調整、取入れ的調整、同一化的調整、統合的調整という考え方²³⁾を採用した。
- 3) 学習意欲とは、学習を遂行していくうえでの必要な意志とそれに伴う主体的学習行動を指す。浅野の尺度を参考に、この学習意欲は動機づけを強化し意図された行為を実行する役割²⁴⁾とみなし、主体的な行動としての積極的関与と継続意志のこととした。

8. 倫理的配慮

A大学の責任者の承諾を得たのち、対象者には紙面と口頭で研究の目的と趣旨、回答に要する時間及び無記名、自由意思、任意性の保持、プライバシーの保護、収集データの秘密保持、目的以外に使用することはないこと、成績には関係ないことを説明。質問紙は回収箱にて回収、提出をもって研究への同意とみなした。また Web 調査の場合、紙面と口頭で上記説明書と共に、個人名が開示されない複数回答を避ける設定としA大学内の処理であることを説明し、QRコードを添付しその送信をもって同意とみなした。

なお学習動機づけ尺度（安藤）及び学習意欲尺度（浅野）は、開発者からの使用許可をえた。また本研究は、旭川大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号4）。

Ⅲ. 研究結果

1. 対象者の概要

質問紙（webを含む）を228人に配布、212人から回収され（回収率93.0%）た。有効回答率は100%であった。対象者212人のうち女性は184人（86.8%）、男性は28人（13.2%）、学年は、1年生66人、2年生52人、3年生59人、4年生35人であった。さらに入学状況は、現役入学生194人（91.5%）、浪人生6人（2.8%）、社会人入学11人（5.2%）、その他1人（0.5%）、現役生以外は合わせて18人（8.5%）であった。対象者の最少年齢は18歳、最高年齢は37歳、平均年齢は20.3歳であった。

2. 看護学実習の現状とそれ以外のフィールド体験について

A大学における看護学実習の時期は、1年生後期に基礎看護学実習Ⅰ、2年次後期に基礎看護学実習Ⅱ、3年次後期～4年次前期に領域別実習、4年次後期に看護統合実習を実施していた。調査時期において1年生は看護学実習が未経験であり、2年生は基礎看護学実習Ⅰのみ、3年生は基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱのみ、4年生は領域別実習中であり看護統合実習は未経験であった。したがって基礎看護学実習Ⅰを経験した者が146人（68.9%）、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱを経験した者は94人（44.3%）、領域別実習を経験している者は35人（16.5%）、すべての看護学生は看護統合実習が未経験であった。

また看護学実習は、2～3年生は医療施設のみの実

習経験であり、4年生では医療施設と福祉施設、幼稚園の実習経験があった。また看護学実習以外での現場体験がある者は、37人（17.5%）、体験のない者が170人（80.2%）であり、実習以外で現場体験のない者は全体の8割以上であった。しかしこの体験は学年進捗とともに増え、1年生は皆無であったが2年生では6名（12.0%）、3年生は15名（25.9%）、4年生は14名（40%）となっていた。体験の内容は、サークル活動におけるボランティア活動、教員や地域が企画するイベント活動への参加であった。

3. 対象者の志望の動機

対象者212人中回答のあった207人について看護師志望の一番の動機は、「経済的安定」が60人（29.0%）で最も高く、次いで「社会性・将来性」と「看護への興味・関心」がいずれも56人（27.1%）で、以上の3項目で8割以上を占めていた。また「自分に向いている」13人（6.3%）、「将来が見えないからとりあえず」10人（4.8%）、「その他」が12人（5.8%）であった（図1）。その他の内容では、「ドラマの影響を受けた」、「入院の経験から」、「家族が病気になり看護を目指した」、「小さい時からの夢」、「親に勧められたから」、「保育士の資格を活かして専門的に子どもに関わりたい」があげられていた。

学年別の志望動機を見てみると、1年生では「看護への興味関心」（32.8%）、「自分に向いている」（12.5%）と回答した割合が他の学年より一番高かった。（図1）

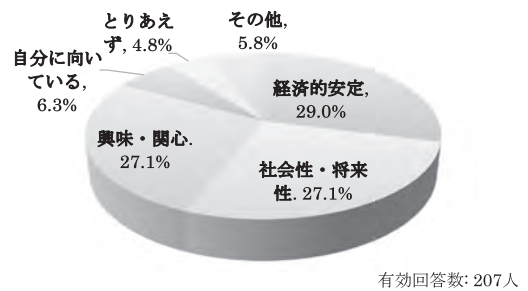


図1 看護師志望の動機

4. 全学年の学習動機づけ及び学習意欲の状況

1) 全学年の学習動機づけ及び学習意欲について（表1）

学習動機づけ14項目は、佐藤²⁵⁾が用いた内発的動機づけ、同一化的調整、取入れ的調整及び外的調整に分類した。その4群では同一化的調整の平均値が4.42 (±0.73) で他3群より有意に高く ($p < .01$)、取入れ的調整で3.86 (±1.05)、内発的動機づけで3.37

表1 学習動機づけ及び学習意欲の平均値（標準偏差）・中央値と信頼度係数

n=212

			平均値(SD)	中央値	平均値(SD)	中央値	α係数
学習動機づけ	内発的動機づけ	N2.新しい知識を得るのが楽しいから	3.75(1.00)	4.0	3.37 (1.10)	3.0	0.84
		N4.授業内容が楽しいから	3.39(1.04)	3.0			
		N5.勉強することが楽しいから	2.97(1.14)	3.0			
	同一化的調整	N3.勉強内容が将来役に立つと思うから	4.40(0.77)	5.0	4.42 (0.73)	5.0	0.85
		N6.今、勉強しておかないと後で困るから	4.42(0.64)	5.0			
		N7.自分のためになると思うから	4.41(0.68)	4.5			
		N9.勉強すべき大切な内容だと思うから	4.33(0.79)	4.0			
	取入れ的調整	N11.希望する職業に必要なだから	4.55(0.74)	5.0	3.86 (1.05)	4.0	0.76
		N1.勉強しないと不安だから	4.17(0.88)	4.0			
		N12.よい成績をとりたいたから	3.83(1.10)	4.0			
	外的調整	N13.学生なので、勉強するのが当たり前だから	3.58(1.10)	4.0	2.12 (1.17)	2.0	0.79
		N8.勉強しないと教師に叱られるから	2.46(1.18)	3.0			
		N10.勉強しないと親がうるさいから	2.03(1.18)	2.0			
			N14.他人に勉強しろと言われるから	1.87(1.07)	1.0		
学習意欲	積極的関与	S1.自分では学習意欲は高いほうだと思う	2.90(1.08)	3.0	2.80 (1.11)	3.0	0.80
		S3.自分では積極的に学習していると思う	2.92(1.10)	3.0			
		S5.勉強は好きである	2.57(1.14)	3.0			
	継続意志	S2.できるだけ長く勉強を続けたい	3.06(1.23)	3.0	2.89 (1.16)	3.0	0.77
		S4.常に勉強したい気持ちがある	2.72(1.07)	3.0			

(±1.10)の順に低下し、外的調整は2.12 (±1.17)で他群より有意に低かった(p<.01)。よって4群は各々独立性があることが示唆された。

また学習意欲の5項目は、浅野の分類²⁶⁾の用いた積極的関与、継続意志に分類した。積極的関与は2.80

(±1.11)、継続意志は2.89 (±1.16)であり、以上の2群は有意な差はなく、2群は関連性の可能性が示唆された。

2) 学習動機づけ及び学習意欲における性別・入学時の状況・学年の比較(表2)

表2 A大学学生の性別・入学時の状況・学年別における学習動機づけと学習意欲の比較

属性	N(%)	学習動機づけ				学習意欲	
		内発的動機づけ	同一化的調整	取入れ的調整	外的調整	積極的関与	継続意志
性別	女 184(86.8)	3.36 (0.87)	4.42 (0.59)	3.87 (0.80)	2.11 (0.91)	2.77 (0.92)	2.90 (1.03)
	男 28(12.2)	3.39 (1.21)	4.45 (0.53)	3.82 (1.11)	2.24 (1.25)	2.94 (1.01)	2.77(1.08)
	z値	-0.44	-0.06	-0.27	-0.06	-0.94	-0.58
入学時の状況	現役生 194(91.5)	3.34 (0.92)	4.41 (0.59)	3.85 (0.85)	2.18 (0.97)	2.76 (0.92)	2.84 (1.04)
	現役生以外 18(8.5)	3.65 (0.90)	4.53 (0.41)	3.93 (0.81)	1.56 (0.62)	3.22 (0.96)	3.36 (0.95)
	z値	-1.23	-0.64	-2.43	-2.62*	-2.01*	-2.12*
学年	1年生 66(31.1)	3.75 (0.79)	4.64 (0.40)	4.19 (0.70)	2.16 (1.02)	2.91 (0.93)	3.14 (0.95)
	2年生 52(24.5)	3.22 (0.98)	4.41 (0.52)	3.86 (0.85)	2.01 (1.08)	2.73 (0.91)	2.83 (1.09)
	3年生 59(27.8)	3.23 (0.94)	4.19 (0.76)	3.78 (0.87)	2.33 (0.86)	2.69 (1.03)	2.69 (1.10)
	4年生 35(16.5)	3.11 (0.84)	4.43 (0.44)	3.37 (0.80)	1.88 (0.71)	2.83 (0.77)	2.83 (0.96)
	H値	18.81**	14.02*	23.29**	7.47	2.26	7.09

Z: Mann-WhitneyのU検定 H: Kruskal-WallisのH検定

*p < 0.05 **p < 0.01

学習動機づけ及び学習意欲は性別による有意な差は見られなかった。また、入学時の状況による比較において、内的調整、同一化調整、取入れ調整は有意な差はなかったが、外的調整は現役生以外より現役生の方が、積極的関与と継続意志は現役生よりそれ以外の者が有意に高く ($p < .05$)、現役以外の者の方が人に言われることなく積極的に継続的な学習意欲の意志を持っていた。

学年別で比較すると、学習意欲については有意な差はなかった。しかし学習動機づけに関しては、1年生の内発的動機づけ、同一化的調整、取入れ調整は高学年より有意に高かった ($p < .05$)。特に内発的動機づけと取入れ調整は4年生より、同一化的調整は3年生より有意に高かった ($p < .01$)。外的調整は各学年で有意な差はなかった。学習動機づけ下位4項目は、2～4年生では有意な差は認められなかった。

IV. 考 察

1. 看護学実習の学外体験について

A大学の学生は、看護学実習のフィールドは主として医療施設であった。4年生になりやや施設や地域の実習へと拡大がみられるものの、看護教育課程自体がまだ医療モデルから脱しきれていないことがうかがわれた。本研究からも実習以外の現場体験の多くは、サークルやボランティア活動であった。これらは学生の自主活動過ぎないため、関心がないと実習以外の現場体験することなく看護教育課程を終えてしまう可能性がうかがわれた。

社会は地域包括ケア時代に突入している。地域が主たる生活の場としてそこを支える看護職であるならば、自主活動以外にも生活の場への臨地体験が必要とされると考える。現在看護学生は、過密なカリキュラムを単位取得のためだけではなく、様々な多様性のある地域への積極的な看護学実習体験が望まれると考える。多様な価値観を受け入れられるよう更なるカリキュラム改正の中での柔軟な人への関わりが必要であると考える。今後学習意欲との関連も調査する必要があると考える。

2. 看護を目指す志望の動機について

看護を志望した第1の動機に、経済性や将来性といった内容が全体の6割近くを占め、職業的キャリアを意識した現実的な動機に強く支えられていた。特に看護職は社会からの需要や認知度も高く国家資格であることから、生涯働きながら自己研鑽できる職業であ

ることが看護を目指す一番の動機につながっていると考える。しかし看護に対する興味・関心がないわけではない。残り3割の学生は、現実的な動機に合わせて看護職への好奇心をもち看護を学ぶモチベーションを上げていた。

その中で、特に1年生は看護に対する興味・関心や自分に向いているといった動機の割合が高かった。看護を目指す志望の動機には社会における看護師に対するイメージ、すなわち伝統的な女性的役割や優しさというステレオタイプのイメージが浸透している²⁷⁾。そのため入学して間もなくまだ看護に現実味がない1年生は、本来の看護師像を描き切れていないと考える。そしてその興味や関心は学年が上がるにつれて低下している。これは主観的な現実認識が、看護の学びを進め様々な課題や自分自身と向き合い深い洞察が加えられ再構築されていく中で、看護に対する興味や関心が一時に薄れ、現実はその甘くはなかったと認識するのではないだろうか。齋藤は「1年生の現実認識の甘さが2・3年生ではそれが修正されていく」²⁸⁾と述べているように、憧れや関心は教育課程を経る中で、本来の看護に対する客観的な姿勢が養われ、現実の看護を受け止めるようになっていくと考えられる。

また遠藤²⁹⁾の調査同様、志望動機があいまいな者も各学年に若干名存在していた。看護を志すための学習継続には、強い動機に支えられる必要がある。このような学生が、学習途中で学びを投げ出しドロップアウトしてしまわないよう支援する側もその現実を知り4年間の学習継続の中で注視していく必要があると考える。また志望動機の中には、親からの勧めやTVドラマからの影響もあった。看護教育には職業社会化促進機能があるといわれている³⁰⁾ように、職業的アイデンティティが形成される上で、憧れとリアリティとのギャップに苛まれぬよう動機づけへの継続的支援が必要であると考える。

3. 学習の動機づけと学習意欲について

これまでの動機づけ研究の内発的—外発的動機づけという二項対立という枠組みではなく、自己決定理論に基づき内発的動機づけ、同一化的調整、取入れ的調整、外的調整という次元上の連続性で学習意欲を概観した。内発的動機づけとは活動に対する好奇心や興味関心、同一化的動機づけは自分にとって重要で価値のあるものと受け止め行動する動機づけ、また取入れ的調整は達成感や有能感を得るための行動であり、外的調整は外部からの圧力によって行動するものである³¹⁾とされ、これらは自己決定の高い順に配列されて

いる。さらに動機づけを支える意志力を積極的関与と継続意志とし、その強化の程度の特徴を概観した。

学年全体では、同一化的調整が一番高く、取入れ調整、内発的動機づけの順で、外発的動機づけが一番低かった。この傾向は学年別にみても同じであった。同一化的調整とは、職業上における価値と自分の価値観の一致に基づく学習の動機づけである。一般に内発的動機づけが一番高い動機づけとされているが、看護を生涯にわたる職業として構築するための学びとは、単に興味や関心といった言わば面白いからやるといった動機づけだけでよいとは考えにくい。A大学の学生は、面白いから学習するよりむしろ、看護師という職業上の価値に力点をおき、さらに自己達成感を得たいという動機づけの原動力になっていた。また外発的動機づけが低いことから、自ら職業としての必要性に裏付けされ充実感を得ることで学習意欲を高めていた。看護を学ぶことは人の命に関わることから人間性や倫理観が問われる職業であるため、単に面白さだけでは立ち行かず、看護の仕事を実行する覚悟と忍耐が必要である。このように職業的な資質に価値をおき看護を学ぶことは容易なことではない。しかしながら、そこに看護の魅力や醍醐味が内発的動機づけとして加わるならば、より一層の学習意欲が高まるのでは考える。一方で、現役生以外は現役生より外的動機づけが低く、さらに積極的関与し継続的にやり遂げようとする意志は高かった。浪人もしくは社会を一度経験している体験は学習動機づけを強化することを考えると、そのことを自らの強みとしてモチベーションを高めていることが考える。これらの状況を考慮しながら教員が教育的関わりや支援を持つことが重要であると考えられる。

また、1年生は他の学年より内発的動機づけ、同一化的調整、取入れ調整が有意に高かった。先行研究でも1年生は学習意欲が他の学年より高いことがわかっており³²⁾³³⁾、本研究においても同様の結果であった。1年生は入学時の志望動機が学習の動機づけになり学習をスタートさせる。真新しい知識や技術を学ぶことで一層意欲が増していることが考えられる。しかしながら学年が進むについてその傾向が低下することも先行研究同様である。看護の学習が深まっていく中で、1年生にあるモチベーションを一直線に4年次まで持続させるのは困難なのかもしれない。学生は様々な看護もしくは人間関係の体験を通じ悲喜交々しながら看護を学んでいる。学習内容が深化するに従い動機づけの様相も変化し変容してくることが考えられる。

またその動機づけを行動の面で支える強い意志については、各学年に有意な差がなかったことから、1年にある高い動機づけが何かの誘因で意欲喪失に向かうと、どの学年においても再起不能に陥る可能性も秘めていることが考えられる。それでもなお看護師という強い職業観に裏付けされる意志をもち続けながら、変化し変容する動機づけの様相に着目しつつ、各学年でおこる実習や体験学習などのイベントを、よりよい動機づけとしながら支援し学習意欲の推移を見守っていくことが教育には必要であると考えられる。

V. 結 論

1. A大学学生の実習は医療施設と福祉施設で行われており、実習以外の現場体験は、ボランティアやサークル等であり、体験者は全体の2割弱であった。
2. 看護を目指す志望の動機では、経済的安定、社会性・将来性、看護への興味・関心で全体の約8割を占めていた。将来性が見えずとりあえず看護に進んだ者も5%いた。
3. 学習動機づけでは、現役生より現役生以外の者の方が、外的調整が有意に低かった。学年別では外的調整に有意な差はなかったが、1年生では内発的動機づけ、同一化的調整、取入れ調整が上級生よりも有意に高かった。
4. 学習意欲は、現役生より現役生以外の者が有意に積極的関与や継続意志が高かった。
5. A大学看護学生は、学習への興味・関心といった内的動機づけより、むしろ職業として学ぶべき内容としての同一化的調整によって高く学習が動機づけられていた。反対に他人に言われて勉強するという外的調整は他の動機づけに比して低かった。

研究の限界

本調査はA大学のみ状況を反映しているため、一般化をするためには限界がある。また調査時点では、2020年ほぼ1年にかけてCOVID-19による学習意欲も影響を受けたため教育環境が従来と違う可能性もある。また本調査は、当該年度における1～4年生を対象としたため、「学習継続困難」「学習動機づけ」「学習意欲」の学年差が学習の進化によるものか、単に学年ごとの個性による可能性もある。

本研究は、日本私立学校振興・共済事業団における2020年度学術研究振興資金（研究分野：教育学）の助成の一部により実施したものである。

文 献

- 1) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラム－「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学習目標、文部科学省、2017。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf(2020.9.24閲覧)
- 2) 厚生労働省：看護師等学校養成所入学状況及び卒業就業状況調査、2019。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html>。(2020.4.4 閲覧)
- 3) 石井秀宗, 椎名久美子, 柳井晴夫：看護大学生の学習活動と学習意欲等に関する研究, *Quality Nursing*, 9 (11), 48-62, 2003.
- 4) 政府統計の総合窓口看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査、2019。
https://www.estat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450141&tastat=000001022606&cycle=8&result_page=1。(2020.4.4 閲覧)
- 5) 軸原久美子他:3年課程看護専門学校中途退学者の退学に至った要因, *日本看護学教育学会学術集会講演集*, 25, 188, 2015.
- 6) 南本ゆみ, 中山登志子, 舟島なをみ：看護基礎教育機関を退学した学生の退学に至る経験の概念化. *看護教育学研究*, 28, 8-9, 2019.
- 7) 遠藤恭子, 板倉朋代, 河野かおり, 関根龍子：基礎看護技術演習における看護学生の学習動機づけの推移－看護学生の学習動機づけ尺度を使用して, *獨協医科大学看護学部紀要*, 11, 1-11, 2017.
- 8) 高橋清美, 中野榮子:学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足感－内発的動機づけによる実習効果, *福岡県立大学看護学部紀要*, 1, 29-39, 2003.
- 9) 相撲佐希子：1年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響, *日赤看護誌*, 16 (1), 41-46, 2016.
- 10) 阿部朋子, 重松豊美, 服部容子, 前川幸子：看護学生の看護職への志向の特徴, *甲南女子大学研究紀要*, 5, 33-40, 2011.
- 11) 安藤史高:重視する英語技能の生徒－教師間での不一致・授業に対する不満と英語学習動機づけとの関連, *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)*, 47, 185-195, 2000.
- 12) 浅野志津子, 渡邊はるか:教職課程履修学生の学習に関する意識調査, *目白大学高等教育研究*, 24, 111-119, 2018.
- 13) 岡田涼, 中谷素之:動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響－自己決定理論の枠組みから. *教育心理学研究*, 54, 1-11, 2006.
- 14) 永嶋由利子:看護学生の学習意欲の検討, *山口県立大学看護学部紀要*, 5, 39-45, 2001.
- 15) 佐藤美佳：自己決定理論の視点に基づいた看護学生の自律性欲求と自尊感情, 学習動機づけとの関連－教育課程・学年別比較, *八戸短期大学紀要*, 35, 53-71, 2012.
- 16) 遠藤恭子, 関根龍子:看護学生の内発的動機づけと授業形態別にみた学びたい気持ちの変化との関連, *獨協医科大学看護学部紀要*, 8, 1-12, 2014.
- 17) 住谷圭子, 甘佐京子, 松本行弘, 山下真裕子：看護専門学校生の学業継続に影響する要因, *人間看護学研究*, 13, 43-49, 2015.
- 18) 石井秀宗, 椎名久美子, 矢萩井晴夫：看護大学生の悪臭活動と学習意欲等に関する研究, *Quality Nursing*, 9 (11), 48-69, 2003.
- 19) 安藤史高:大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連, *一宮女子短期大学紀要*, 44, 91-99, 2005.
- 20) 佐藤美佳：看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求との関連－自己決定理論の視点から, *日本看護研究学会雑誌*, 36 (2), 35-46, 2013.
- 21) 浅野志津子：学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程－放送大学生と一般大学生を対象とした調査から, *教育心理学研究*, 50, 141-151, 2002.
- 22) Ryan,R.M & Deci,E.L: Self-Determination Theory and the Facilitation of Intinsic Motivation, Social Development and Well-Being, *American Psychologist*, 55, 68-78, 2000.
- 23) 安藤史高:重視する英語技能の生徒－教師間での不一致・授業に対する不満と英語学習動機づけとの関連, *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)*, 47, 185-195, 2000.
- 24) 前掲書 21)
- 25) 佐藤美佳：看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求との関連－自己決定理論の視点から, *日本看護研究学会雑誌*, 36 (2), 35-46, 2013.
- 26) 前掲書 12)
- 27) 長谷川貴美子：看護学生における職業社会化と職業意識の関係性, *淑徳短期大学研究紀要*, 51, 167-184, 2012.
- 28) 齋藤和樹, 小林寛幸, 丸山真理子, 花屋道子, 柴田健, 田多香代子：看護学生の学科志望動機, 人生の意味・目的意識, 性格の特性の関連について, *日本赤十字秋田短期大学紀要*, 4, 3-8, 1999.
- 29) 遠藤恭子, 関根龍子:看護学生の内発的動機づけと授業形態別にみた学びたい気持ちの変化との関連, *獨協医科大学看護学部紀要*, 8, 1-12, 2014.
- 30) 前掲書 27)
- 31) 外山美紀:自律的な理由で勉強することが適応的である, *ベネッセ教育総合研究所小中学生の学びに関する調査報告書*, 1-9, 2015.
- 32) 前掲書 16)
- 33) 澤村莉香子, 本間夏子, 佐藤信枝：看護大学生の特性的自己効力感が学習意欲に与える影響－学年間比較, *第17回新潟医療福祉学会学術集会*, 44, 2017.